

今年も大齋節が始まりました。今日の特禱にあるように、私たちはイエス様が荒野で40日40夜断食の修行をされたように、イエス様に倣って、イースターまでの40日間、信仰の修行をしようというのが、大齋節の趣旨です。最初は、その年のイースターに洗礼を受ける人のために、その準備期間としてできたものらしいですが、やがて、この期間は、クリスチャンみんなが守るべきだ、ということになって、現在のような形になりました。今年の場合、2月22日の水曜日から、イースターの前日4月8日までで、数えると46日あるのですが、その間の日曜日は数えないことになっていて、6回の日曜日を除いた40日ということになります。

みなさん、聖書に40という数字が出てくるのは、他に何か思い浮かびませんか。今日の旧約には創世記が選ばれていますが、ノアが箱舟に入って、雨が降り続いた日数が、四十日四十夜、ということになっています。それから、モーセがエジプトに住む奴隷のイスラエル人を率いて、約束の地まで旅をした期間が40年です。また、モーセがその途中、神の山ホレブ、またの名をシナイ山と言いますが、十戒を授かるまで、山にこもった日数も40日。ついでに、このシナイ山にもう一人登った有名な預言者、エリヤが、北イスラエル王国のアハブ王と妃のイゼベルから逃げて、このシナイ山にたどり着くまで歩いた日数も40日40夜です。

ちなみに、新約で、復活したイエス様が、しばしば弟子たちに姿を表し、復活信仰を植え付けた期間がやはり40日で、40日目に天に昇られたことが使徒言行録の最初に出てきます。

どうも、聖書で40という数字が出てくると、それは、単なる数字ではなく、「準備」とか「試練」を十分に経たことを示している数字のようです。

さて、今日の使徒書では、最初に罪を犯したアダムと、人類に恵みをもたらしたイエス様のことが対比されて書かれています。旧約で読んだ、蛇の誘惑に負けて、人類全体が滅びる運命になったアダムの話と、福音書で読んだ、悪魔の誘惑に勝ったイエス様の違いを説明したものです。しかし、大齋節という「準備」とか「試練」ということを念頭に置くなら、イエス様の受けられた「誘惑」というか「試練」は、アダムよりも、「モーセ」と比べた方が、わかりやすいように思えます。

イエス様が最初に受けた誘惑は、断食で空腹になった時、「石をパンにかえみたらどうだ。」という悪魔のささやきでした。それに対して「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と書いてある、と答えられました。これはどこに書かれているのでしょうか。

それは、旧約294ページ。申命記8章3節。です。この申命記のことをリビングバイブルでは「モーセの最後の説教」という表現で紹介していますが、ここには、出エジプトや荒野の放浪生活をまとめた、その意義などが書かれています。それを、1節から6節まで読んでみましょう。少し長いですが、

◆神の賜る良い土地

今日、わたしが命じる戒めをすべて忠実に守りなさい。そうすれば、あなたたちは命を得、その数は

増え、主が先祖に誓われた土地に入って、それを取ることができる。あなたの神、主が導かれたこの四十年の荒れ野の旅を思い起こしなさい。こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわち御自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。この四十年の間、あなたのまとう着物は古びず、足がはれることもなかった。あなたは、人が自分の子を訓練するように、あなたの神、主があなたを訓練されることを心に留めなさい。あなたの神、主の戒めを守り、主の道を歩み、彼を畏れなさい。」

私は、17年前、出エジプトのコースをバスに乗って通りました。2回目の出エジプトでした。大都会であるエジプトのカイロで、人間文明の象徴のようなピラミッドやツタンカーメンのマスク、また、1回目の時には見る事が出来なかった、モーセの時代に権力を振るった、ラメセス王のミイラも見ることができました。現代のカイロには、豊かな文化、そして贅沢な生活がありました。おそらく、モーセの時代にも、同じだったでしょう。エジプトには、パンに代表される物質文明が栄えて、それさえあれば、人間は幸福に暮らせる、という考えがあったのかもしれませんが。

しかし、物質文明の発展は、人間の生き方、倫理・道徳を墮落させてしまいます。砂漠の宗教である聖書の教えには、物質文明に背をむけるような考えが根底にあるように思えてしかたがありません。

モーセはエジプトに背を向けたし、それより数百年前、アブラハムというイスラエルの信仰の父は、東のメソポタミヤ文明に背を向けて、砂漠に導かれた人でした。イエス様も40日の荒野での断食修行の間に、都市文明の誘惑と戦うことになったのです。

エジプトを出たイスラエル人たちは、モーセに導かれて、紅海を渡り、シナイ半島にはいりましたが、すぐに食料に困ってしまいました。そして、スエズ湾の海の反対側に見えるエジプトでの、奴隷であるが、腹一杯肉鍋を食べていたことを思い出すのです。人間は、自分の生活が保証されるなら、どんな屈辱的な生活であってもかまわない、生活のためなら、自分の良心・魂を売ってもかまわないように考える人が意外に多いのではないのでしょうか。ただ、食べるためだけに、自分の人生を費やしている、という生活になりやすいのです。

そのような人間の生き方に対して、「人はパンだけで生きるものではない。もっと質の高い生き方を神様から習うことが必要なんだ。」ということですね。日曜日の礼拝を守ろうとするが、ついつい、今までの気ままな生活に後ろ髪引かれる、というような誘惑が「石をパンに変えてみろ」という悪魔のささやきに通じるのです。

さて、シナイ半島をバスで走り続けると、最初のうちは、砂の砂漠が続き、スエズ湾沿いを走るのですが、しかし、途中から内陸に入ってゆきます。すると、山が大きな岩の塊のように聳え立って、もうエジプトの大きな町も見えなくなります。もう引き返すことは考えられませんが、岩ばかりの山を縫うように走りますと、ここを歩いて行った人々はどんな気持ちだったのだろう。こんな所で生活できるのだろうか、と不安になったのではないか、と思えてきます。

食べ物の問題が、毎朝降る「天からのマナ」によって解決したあと、人々は飲み水のこと、モーセと争い、「果たして、主は我々の間におられるのかどうか。」と、神様を試すような発言が出てきます。

生活に行き詰まりが起こったりすると「本当に神様は私のことを心配してくださっているのだろうか、神様がいるのなら、私を支えてほしい、」という気持ちが起こるのではないのでしょうか。そして、目に見える形でその保証を期待してしまいます。そんな甘えた信仰が、神様からの救いの手を期待しての、「神殿の屋根から飛び降りたらどうだ」という誘惑になるのですが、イエス様はそれを拒否されました。

神様からの支えをたとえ感じられなくても、神様は私を愛し、私を良い方向へ導いてくださる、という確信を持って生きるように、「あなたの神である主を試してはならない。」と言われたのです。

さて、シナイ半島の奥地に入り、神様の山であるシナイ山別名ホレブ山に着くと、やがてモーセは神様に呼ばれて山の上に入り、40日間そこで神様からの言葉を聞き、十戒を授かります。ところが、なかなかモーセが降りてこないことに、人々は待ちきれなくなって、モーセにかわって自分たちを導いてくれる神様を作ってくれ、とアロンに頼みます。そして、金の子牛の偶像を作るのです。

金の子牛というのは、人々の繁栄を約束する神様のことです。それは、エジプトの肉鍋にも通じる、安易に自分を幸福にしてくれる、目の前の利益に飛びつく信仰です。神様ではないものを神様の位置にすえて、悪魔に魂を売り渡すのです。

イエス様は断固それを拒否されましたが、私たちはどうでしょう。自分はキリストに従う、と洗礼の時、約束しておりながら、実は、神様のことより、人々の評判、評価、そんなものに必死になる。それが私たちの現実ではないのでしょうか。

悪魔の誘惑に対して、毅然とそれを退けた、イエス様の信仰の強さに助けられ、自分の中にある偶像崇拜の間違った信仰をざんげし、反省する大齋節にしたいと思います。